

## 「夜をこめて」考

小林 賢 章

同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・教授

## 一

『後拾遺和歌集』<sup>[1]</sup>九三九番は、清少納言の次のような歌である。

大納言行成ものがたりなどし侍けるに、うちの御物忌にこもればとて、いそぎかへりてつとめて、とりのこゑにもよほされてといひおこせて侍ければ、よぶかかりけるとりのこゑは函谷関のことにや、といひにつかはしたりけるをたちかへり、これはあふさかのせきにはべりとあればよみはべりける

清少納言

939よをこめてとりのそらねにはかるともよにあふさかのせきはゆるさじ

右の歌は、『百人一首』や次節で見えるように『枕草子』にも採られており、我が国の短歌の中でも、最も人口に膾炙している歌の一つと言えよう。まず、右の歌の解釈を『後拾遺和歌集』のおもだった注釈書に見ておくことにする。

夜がまだ深いのを隠して、鶏の声をまねて、だまそうとしたとしても、(中国の故事にみえる函谷関なら開きもしましようが、愛する男女が相逢うという名を持ったわが国の)逢坂の関は(だまされて開くことなど)けっしてゆるしはしないでしょう。(藤本一恵「講談社学術文庫」584頁587)

一晚中鳥のうそ鳴きでだまして、この逢坂の関では無駄です。逢うことなんかとても無理。(川村晃生「和泉古典叢書」)

まだ夜が深いのに鶏の鳴きまねをしてだまそうとしても、まさか逢坂の関守はだまされて通しはいたすまい。(久保田淳・平田喜信「新日本古典文学大系」)

まだ夜の明けぬうちに鶏がうそ泣きして函谷関の関守を欺いたとしても、あな

たとわたしの逢坂の関は、(そんなあまい手段では)絶対にお許ししないでしよう。だめってことよ。(藤本一恵『後拾遺和歌集全釈』風間書房)

夜がまだ深いうちに鶏の鳴き真似でだまそうとしても、函谷関ならいざ知らず、男女を隔てる逢坂の関は、だまされて開くことなど決してごさいますまいよ。(犬飼廉・平野由紀子・いさら会『後拾遺和歌集新釈』笠間書房)

右に見るように、諸注釈書同じような口語訳を行っている。その実態は、後に検討するが、口語訳の類似と言うことでは、『百人一首』、『枕草子』の注釈もまた、ほぼ類似しているのである。

本稿で、問題にし、検討するのは、冒頭部の「夜をこめて」の部分である。その箇所はどのように口語訳されていたであろうか。その部分を再度掲載すると、「夜がまだ深いのを」(『学術文庫』)、「まだ夜が深いのに」(『新大系』)「夜がまだ深いうちに」(『新釈』)は同意であろう。「一晚中」(『和泉古典叢書』)、「まだ夜の明けぬうちに」(『全釈』)などは前三者といささか異なる。全体の口語訳に大差がないのだから、当然、冒頭部のこの箇所の口語訳にも差がないはずであるが、実は小異があるのである。もちろん、これら四者と、「一晚中」には違いがあると言えよう。

## 二

次に、『百人一首』の口語訳も見ておくことにする。『百人一首』の注釈は膨大なかずであることここに述べるまでもない。ただ、本稿ではその傾向を知ればよいので、身近なかつ出来るだけ近年の注釈書を引用することにする。また、ここで、既に指摘されていることだが、当該歌の第二句「とりのそらねは」は『後拾遺和歌集』と『枕草子』(三巻本)では「とりのそらね」となっている萩谷朴に指摘がある。<sup>[2]</sup>ただ、本論では二とハの違いによって大きな意味差は生じないので、この問題には

踏み込まない。

まだ夜のあけないうちに、にせの鶏の鳴き真似をして、函谷関の番人をだましたとしても、逢坂の関はそうは参りますまい。うまいことをおっしゃっても、私は決して逢いませんよ。(島津忠夫「角川ソフィア文庫」)

夜の明けないうちに、鶏の鳴き声をまねて、だまそうとしても、その函谷関ならば、ともかく、あなたと私との間の逢坂の関は、決して通る事を許しませんよ。(有吉保「学術文庫」)

深夜のうちに、鶏の鳴きまねで人をだまそうとしても、あの函谷関ならいざしらず、この逢坂の関は決してゆるすまい。(鈴木日出雄「ちくま文庫」)

夜が明けていないのに、かの孟嘗君のように、鶏の泣き真似をだまして、逢坂の関の関守はだまされませんし、私もだまされて、すぐ戸を開けてあなたと逢ったりはしませんよ。(谷知子「角川ソフィア文庫」)

ここでは、「夜の明けないうち」の方が、「深夜のうちに」より多そうであるが、やはり、注釈が二つあることには、違いない。

### 三

次に、『枕草子』の注釈を見ておく。それについて、本和歌と関係する『枕草子』本文を引用しておくことにする。『後拾遺和歌集』の詞書とほぼ同一の内容になることは、当然である。

頭弁の、しきにまゐり給ひて、ものがたりなどしたまひしに、夜いたうふけぬ。あす、御物いみなるにこもるべければ、うしになりなば、あしかりなむとて、まゐり給ひぬ。つとめて、くら人所のかう夜がみひきかさねて、けふは、のこりおほかる心ちなむする。夜をとほして、むかし物がたりもきこえあかさむとせしを、には鳥のこゑにもよほされてなむと、いみじう言おほくかき給へる、いとめでたし。御返りに、いと夜ふかく侍りける鳥のこゑは、まうさう君のにやときこえたれば、たちかへり、まうさうくんのはとりは、かんこく関をひらきて、三千のかく、わづかにされりとあれども、これは、あふさかのせき也とあれば、

夜をこめて鳥のそらねにはかるとも世にあふさかの関はゆるさじ。

心かしこき関もり侍るときこゆ。又、たちかへり、あふさかは人こえやすき関なれば鳥なかねにもあけて待つとかとありしふみどもを、

引用は、『枕草子解環』<sup>③</sup>によったから、本文は『枕草子』三巻本ということになる。ただ、当段は堺本・前田本には存在しない。したがって、三巻本と能因本とに存在することになるが、両本間では大きな本文の差異はない。

鳥の虚音は深夜に函谷関の番人をうまくだましたとしても、逢坂の関は、決してそうはまいりません。あなたがいくらうまいことをおっしゃつても私は絶対にお逢いしませんよ。(池田亀鑑『全講枕草子』)

まだ夜の明けないうちに鶏が鳴いて函谷関の関守をだましたとしても、あなたとあうわたくしの逢坂の関はそんなあいまい手段では決しておゆるししないでしょう。わたくしをだまそうとなさつてもむだですわ(田中重太郎「旺文社文庫」)

夜ふけに鶏のいつわりの鳴き声でだまそうとしても、男女あい逢う逢坂の関をこえるようなことはいたしませんよ。(石田稜二「角川文庫」)

夜通し鶏のうそ亡きでだまそうたって、絶対一線を越えることにはなりませんまいよ。萩谷朴『枕草子解環』

一晚中、偽りの鶏鳴でだまそうとしても、逢坂の関は開きませんからね。(渡辺実「新大系」)

ここでも、先に見た『後拾遺和歌集』や『百人一首』と同じように、「深夜」と「まだ夜の明けないうちに」が対立しているかにみえるのだが、『解環』「新大系」では、「夜通し」、「一晚中」と別の表現で口語訳している。『後拾遺和歌集』の注でも、川村晃生が「一晚中」(『和泉古典叢書』)と口語訳していた。もちろん、「一晚中」などの注釈を含めて、今までに見てきた口語訳は、現代語に於いてごく近接した意味であり、さしたる問題とはならないとの見解も生じよう。ただ、「深夜」と「夜明け」が、ここまで対立してきたこと、それらの口語訳に対して、「夜通し」、「一晚中」など、最近新しい注釈が生まれたことは、ヨロコメの解釈が揺れていることを示しており、以上のような解釈の差異の検討をもとに、より妥当な口語訳にたどりつくなら、『枕草子』などのより正確な理解をもたらさだろうと思われる。

## 四

本節では、『枕草子』の該当本文を再検討する。『後拾遺和歌集』の詞書と『枕草子』の該当本文を比較すると、『枕草子』の該当本文が『後拾遺和歌集』の詞書をおおむね含んでいるからである。

「頭弁の、しきにまゐり給ひて、ものがたりなどしたまひしに、夜いたうふけぬ。あす、御物いみなるにこもるべければ、うしになりなば、あしかりなむとて、まゐり給ひぬ。」の部分、「頭弁」は清少納言の恋人の一人藤原行成であること、『後拾遺和歌集』の詞書「大納言行成物語りなどし侍けるに」の部分からわかる。その行成と話をしていたが、行成は、明日は宮中の御物忌みだからと、丑の刻の前に作者のもとを去っていく。丑の刻と寅の刻の間（午前三時）で日付が変わるから、その二時間ほど前、午前一時ごろに行成が清少納言のもとを去ったのである。従来、この行成の行為は、清少納言の前から無闇に早く去っていると解される傾向があったが、そうした見解は失当であろう。次の部分、「つとめて、くら人所のかう夜がみひきかさねて、けふは、のこりおほかる心ちなむする。夜をとほして、むかし物がたりもきこえあかさむとせしを、には鳥のこゑにもよほされてなむと、いみじう言おほくかき給へる、いとめでたし。」とあるからで、「言おほくかき給へる」というのは、幾分かのユーモアは含むとしても、行成の誠実さが表れていると思われ、清少納言自身がその行為を、「いとめでたし」と言っているからである。もし、行成の行為が幾分でも作者を軽視していると清少納言が感じていたなら、翌朝の手紙であるとしても、「いとめでたし」とは言わないはずである。

右文の時間的内実を考えよう。まず、「つとめて」はアカツキの後の時間帯であることを確認しておく。恐らく、今日の朝方に近い意味で、明るくなってとても口語訳すべき単語であろう。この時間帯、後朝の文などもよく送られる時間帯である。もちろん、午前三時は過ぎているから、日付は変わっている。それが、「けふは、のこりおほかる心ちなむする。」である。その残念の本身は、「夜をとほして、むかし物がたりもきこえあかさむとせしを」であることは明白であろう。ここで「夜をとほして」に注目しておかなければならない。「夜をとほして」はもちろん一晩中の意味であるが、その終了時点は午前三時であった。一般的に、当時の「夜」は午前三時までを意識して使用された。ヨモスガラ、ヨヒトヨなど語中にヨが含まれる単語が午前三時までを意識して使われる用法を考えればよいであろう。そのことは、後接して「きこえあかさむ」とアカスという動詞が使用されていることからわかる。

る。動詞アカスは、上接する他の動詞（この場合キコユ）と複合語を作る場合も含めて、午前三時まで時間を過ごすことを意味する。従って、この「夜をとほして、むかし物がたりもきこえあかさむとせしを」を口語訳すると、「午前三時まで昔話でもしたかったのですが」となるのである。「には鳥のこゑにもよほされてなむ」は、「いやあの時鶏の声がしましてね」とでも口語訳するところか。

つぎに、本文は「御返りに、いと夜ふかく侍りける鳥のこゑは、まうさう君のにやときこえたれば」続く。私（清少納言）は、「午前二時に鳴くなんて、孟嘗君の故事に出てくる鶏かしら」と返事したというのである。と、行成からは「たちかへり、まうさうくんのはとりは、かんこく関をひらきて、三千のかく、わづかにされりとあれども、これは、あふさかのせき也とあれば」とあったというのである。「孟嘗君の故事なんて、せいせい三千人が逃げたと言っただけでしょう、私が開けたかったのは、貴方との逢瀬の関、逢坂の関だったのですよ。」となる。

ここで、「夜をこめて鳥のそらねははかるとも世にあふさかの関はゆるさじ」という歌を詠むのである。「夜をこめて」は時間表現であろう。それでは、右の、詞書とも言える『枕草子』の長い説明の中に時間表現があったであろうか。「夜をとほして、むかし物がたりもきこえあかさむとせしを（午前三時まで昔話でもしたかったのですが）」の部分であること、直ぐ思い至るであろう。「夜をこめて鳥のそらねははかるとも」は、「夜をとほして、むかし物がたりもきこえあかさむとせしを」を言い換えたことは明白であろう。

## 五

そこで、一般に「夜をこめて」は午前三時を意識して使用される表現であるかが問題となる。『私家集大成』の中古Ⅱと中世Ⅱを平安時代の用例と考えて、「夜をこめて」が使用されている用例を調べると、同一歌を除き、二十一首を見いだす。その中でヨヨコメテがどのように使用されているかという問題を検討することになる。先に結論を申しておくと、ヨヨコメテには、午前三時までの時間帯を意味する用法と午前三時以降を意味する用法と二つ存在する。その多くが午前三時の日付変更時点を意識して使用されているのである。日付変更時点はどのように歌に詠まれていたかもう一度確かめておこう。

日付変更時点までは、ヨハ（または、ヨナカ）という時間帯であり、これを過ぎるとアカツキという時間帯であった。ヨヨコメテがアカツキの題のもとに詠まれていれば、それだけで、日付変更時点を意味しているのであった。また、アカツキの



時間帯に出ている月は、アリアケノツキであったから、ヨヨコメテとアリアケノツキが一首の中に詠まれていれば、それは、ヨヨコメテとアカツキと同様なことが言えるのであった。アカツキには、旅立ちが行われたから、旅立ちも日付変更時点を意識していた。季節の変更も日付変更時点と結びついていたら、季節の変化も午前三時を意識していたことになる。ここまで述べてきた事象が、ヨヨコメテを一首中に含む歌に詠まれていれば、日付変更時点を意識していると言えるはずである。以上のような事象が詠まれていることが多いことを確認しておく。

まず、詞書に「後朝」を持つ歌から検討しよう。<sup>6)</sup>

1165 (後朝心を) 夜をこめてかへらさりせはくすのはの あくともけさをうらみさらまし (『俊頼』)

この歌は、後朝を詠んでいる。当時の後朝はアカツキの時間帯に行われた。ここでの「あくとも」は午前三時を過ぎる意味で使用されている。「あくともけさをうらみさらまし」は、「日付が変わって今朝になってもその今朝を恨むことはないのだが」の意味である。「夜をこめてかへらさりせば」がその仮定条件である。もし、帰らなかったら、それも、「夜をこめて」帰らなかったらというのである。それでは、「夜をこめる」時間帯はいつなのであるか。「あく(午前三時)」の前か後か。その解釈には同じ状況を詠んだ慈円の歌が役に立つのでここに引用しよう。

935 よをこめてあかてかへさの路すから 心やすむる有明の月 (『慈円』)

このうたは「よをこめて」満足していない(あかて)。そして、女の家から帰っているのである。そこに、「有明の月」が照っているというのである。アリアケはアカツキと同意とともにもいい単語だった。とすると、慈円の歌では、ヨヨコメテは帰る前までの時間を意味していることになる。

俊頼の歌に戻ると、「夜をこめてかへらさりせば」は、夜をこめた(午前三時までを過ぎして)後、帰らなかったらと言う仮定条件になることがわかる。そうすると、日付が変わって今朝になってもその今朝を恨むことはないのだがと条件が結ばれるのも納得がいくのである。これら二首のヨヨコメテは午前三時まで時を過ぎしての意味であることがわかる。もちろん、日付変更時点を意識して、ヨヨコメテは使用されている。

次に、季節の変更を詠う詩を見てみる。

97 夜をこめて秋はたつなりわかせこか 聞のかさ戸をいまやたゝまし (『家良Ⅱ』)

まず確認しておくとは、先にも述べたように、季節は午前三時に変更されるものと考えていた点である。もう一つこの歌で確認しておかねばならないことは、この歌には異伝があって、『夫木和歌集』では、「たゝまし」の部分が「さゝまし」となっているのである。

「たゝまし」と「さゝまし」の違いだが、どちらかの単純な誤写なら問題はないのだが、これら両者がともに生きた本文だとすると、詠歌の時間に大きな違い生じるのである。その問題を考える前に、「聞のかさ戸」を考えておく必要がある。この問題は、『夫木和歌集』の異伝「さゝまし」が意味を教えてくれているのではない。動詞サスが使用できる戸はどんな戸かと言えは鍵のかかる意味であろうから、「かせ戸」のカセは枷の意味であろうことが予測される。首枷、足枷のカセである。「かせ戸」は閨にある鍵のかかる戸ということになる。『家良Ⅱ』はそこを開けて出て行くといい、『夫木和歌集』はその鍵を掛けるというのである。『家良Ⅱ』は午前三時になって、帰っていくことを詠み、『夫木和歌集』は夜の到来の時間に詠んでいることになる。『家良Ⅱ』は午前三時になったので、秋が立つように、恋人(わかせこ)も帰っていく(たたまし)のでしよう、となる。

『夫木和歌集』はアスの午前三時になれば、季節が変わるらしいが、(それまでは時間もあるから)寝室の出入り口を閉じるのでしよう、となる。ヨヨコメテの開始時点の歌か、終了時点の歌かの別はあるが、いずれにしても、ヨヨコムと季節が変わることになり、ヨヨコムに日付変更時点が意識されていることに違いはない。ただ、以下で述べるように、ヨヨコメテはヨモスガラやヨヒトヨよりは短い時間を意味すると考えられるから、『家良Ⅱ』の「たたまし」が正しいと考えられる。

次に、詞書に「曉」がある歌を検討しよう。

229 (曉鹿を) 夜をこめてたちきる山のすそにしも 鳴てや鹿の人にしれぬる (『頼政』)

6 (曉路霞といへるこゝろをよめる) 夜をこめてたつかすみたになかりせは ひとりやこえむさやの中山 (『経盛』)

70 (供花会、聞曉鐘欲帰恋ことを) よをこめてかねのおとたにきこえすは かへ

らぬさきにものはおもはし(『頼輔』)

これらの歌は、曉の歌である。『頼政』と『経盛』の歌は霧や霞が「よをこめてた」っている。ヨヨコメテには、午前三時までの時間帯を意味する用法と午前三時以降を意味する用法と二つ存在した。動詞タツがヨヨコメテと組み合わせられて使用されていると、理解が難しいことを申しておく。つまり、「一晩中立っている霧」か、一晩中掛かって(準備して、朝になって)立つ霧「なのかの問題である。霧や霞が、アカツキの時間帯に立っているのか、その前の時間帯から立っていたかの問題とも言い換えようか。

『頼輔』の方は簡単である。なぜなら、これは、鐘が鳴るという瞬間的な事象だからである。ヨヨコメた後、鐘は鳴っているはずであり、ここでのヨヨコメテは、午前三時まで時を過ぎた後の意味になるのである。

いずれにしても、これらの歌も日付変更時点を意識している。

91よをこめてをきける露の玉くしげ あけてのちそ秋をしりぬる(『公任』)

この歌の場合は、「よをこめてをきける露」とあるから、動詞のヤクは継続動詞であるから、夜を通しての意味であることがわかる。夜を通して置いた露の意味である。この歌で面白いのは、下句の「あけてのちそ秋をしりぬる」の部分であろう。この動詞アクも「日付が変わる」意味であり、日付が変わってから、置かれてる露を見ると季節が秋になったことが分かるというのである。それを説明するためには、一つ前の歌の詞書から引用する。

90(宮に、大夫の、くすりつれてたてまつりたりけるくしのはこそ、ほとへて、秋立日かへすとて、いろ／＼の花ともをいれてかへさせ給ふとて) 初かせにのときき花の露ならは をきてみつへき玉くしけ哉

の歌に続いて、91番歌は、「とかかせたまふるを、かくもいひてんかしとみたまふける」の詞書を持つ歌であり、「秋立日」を詠んでいることははっきりしているからである。動詞アクで日付変更時点を表しているのだから、日付変更時点を意識していると思われる。

## 六

先に、ヨヨコメテの用例二十一首を、「私家集大成」中にあると述べたが、七首の検討を終えた。この七首の検討を通して、ヨヨコメテという句は日付変更時点と、関係することは、ほぼ言えたかと思う。ヨヨコメテの終了時間は日付変更時点であったと言えよう。それでは、開始時点はどうであろうか。

28(いせのくにゝてしほのひたる程に、みわたりといふはまをすきんとて、夜なかにおきてくるに道も見えねは、まつはらのなかにとまりぬ、さてよのあけにければ) よをこめていそきつれともまつのねにまくらをしてもあかしつるかな(『増基』)

この歌では、「夜なか」に出發していることがわかる。また、「まつのねにまくらをしてもあかしつるかな」とアカシていることもわかる。アカスは午前三時までを過ぎす意味だった。「よをこめて」の時間帯はヨナカから「よのあけにければ」の時間であることは明白である。

ここで言いたいことは、果たして、ヨナカ、動詞アカス、ヨノアクという句などが、現代の注釈書などで、正しく理解されてきたかと言うことである。それぞれの語を確認しておく。①ヨナカはヨハと同一の時間帯を指し、午後十一時から(翌日の)午前三時までを指す。②動詞アカスは午前三時まで(ヨヒ・ヨナカの)時間帯を過ぎす。③ヨノアク表現も平安時代では、日付変更時点になることを意味していた。以上のことなどを理解して、増基の歌を見てみる。想像するに、「みわたりのはま」は潮の干満で通行に困難を生じるような浜であったのであろう。それが、「しほのひたる程に、みわたりといふはまをすきんとて」である。通常なら、日付変更時点(午前三時)過ぎに旅に立つのだが、干潮の間に「みわたりのはま」を通り過ぎようとしたのだらう。さすがに、ヨナカに出發したのでつかれたのか、「みわたりのはま」を過ぎたあたりで、一服でもしたのであろう。それが、「まつはら(松原)のなかにとまりぬ」である。それから、「さてよのあけにければ」と日付がかわるまで、「まつはら」でとまっていたというのであろう。是が詞書から推定される時間経過である。

さて、歌を見てみよう。「よをこめていそきつれとも」は、「夜なかにおきてくるに」であらう。「夜なかにおきてくるに」が「よをこめていそきつれとも」なのであった。そして、「よをこめて」の終了時点が、「まつのねにまくらをしてもあかし

「つるかな」であり、詞書の「よのあけにければ」なのであった。ヨヨコメテは（少なくとも、ヨナカと呼ばれる時点から）午前三時までの時間を経過する意味であったと言える。ヨモスガラなどより、時間帯が短いと想像するが、どうであらうか。

## 七

ヨヨコメテには二つの用法があると考えられる。どうもその判定は、ヨヨコメテに後接する句の動詞が瞬間動詞であるか、継続動詞であるかを判断に使えるのではと思われる。そこで以下では、先に継続動詞をとる歌を掲出し、後で瞬間動詞の歌を検討してみる。本稿では、「私歌集大成」中の二十一首を検討の対象とした。こまめで、検討した八首以外を以下では、検討の対象としたい。ただ、そのはじまりとして、前節で上げた増基の歌を内容が分かっているので検討することから始める。

### 継続動詞

28 よをこめていそきつれともまつのねにまくらをしてもあかしつるかな（『増基』）

この歌では、「夜なか」に出發して、「いそきつれとも」とある。ヨヨコメテには「いそきつれとも」と継続動詞が後接している。ヨヨコメテの時間帯に、急いでいるのである。その時間帯に別な行為が、「まくらをしてもあかし」ているのがわかる。当該の歌の検討でも問題にしたが、動詞アカスの用法がヒントになる。動詞アカスは、日付変更時点までの時間を経過する意味で使用される。その際、ヨモスガラ、ヨヒトヨ、コヨヒなどを副詞にとる。ヨモスガラ、ヨヒトヨ、コヨヒなどの単語はそれ自体で午前三時までの時間帯であることを示す単語であった。それらが、動詞アカスと組み合わせられて使用されているのであった。とすると、ヨヨコメテに後接する動詞が継続動詞であるとき、ヨヨコメテは、ヨモスガラ、ヨヒトヨ、コヨヒなどと同じように、午前三時までの時の間を示す副詞のように使われているのではない。ただ、ヨモスガラなどは時間帯だけを意味するが、ヨヨコメテは時間経過と共に、何らかの動作を集中的に、熱心に行っているという付加の意味が加わる。以上のことを理解した上で以下の用例を見ていこう。

130 （五月、時鳥）よをこめてたつねてくれはほとゝきす いまそみやまをいつる  
こゑする

この歌では、ヨヨコメテに「たつねてくれは」と継続動詞が後接しているから、このヨヨコメテは午前三時までの時間帯を表現していることがわかる。また、下句の「いまぞ」は午前三時過ぎそれも午前三時そのものと言っているほどの時間を意味していることがわかる。なぜなら、午前三時以前では、「よをこめる」ことが出来ないからであり、午前三時を離れると、その時も「よをこめる」と言えないからである。

412 よをこめていそきなくなりうくひすは ねくらの竹にはねうつりして（『公重』）

ヨヨコメテに後接する動詞は、「いそきなく」であり、継続動詞が使用されているから、午前三時までの時間帯が鳴いていることになる。

517 （夜泊鹿歌林苑）よをこめてあかしのせとをこき出れば はるかに送る棹鹿の  
こゑ

この歌では、「あかし」が動詞「明かす」の連用形「明かし」と地名明石の掛詞になっている点である。「よをこめて・明かし」で明石を船出したときに鹿が鳴いたというのである。歌は「夜泊」しての出發の時間を示しており、そう読むと詞書の題意と整合する。

547 （霞如珠）よをこめて霞たはしるおとすなり 玉しく庭を明はますみん

ヨヨコメテに後接する動詞句は、「霞たはしる」である。そしてこの歌には、下句に、「明はますみん」の表現が見られる。日付も変わったらの意味で使用されているのであった。

32 （となりのよるのむし）夜をこめてにはうつりせよきりくす かきねはなれ  
かさはりならしを（『覚綱』）

「にはうつりせよきりくす」とある。動詞ウツルは瞬間動詞のようにもとれる。もしそうなら、今晩は隣の家の庭でなく、午前三時になったら、我が家の庭へおいでという意味になるが、夜の間（午前三時まで）にこちらへ移っておいでという理解の方がより妥当か。

782 夜をこめてなをたちわたる雲より 雪の光に明る山の端(『為理』)

この歌のヨヨコメテは「たちわたる雲」に掛かっているから問題はなからう。すると、下句中の「明る」には日付が変わる意味と明るくなるの掛詞と捉えられることになる点は注目されてよい。

191 よをこめてなく鶯の声きけは うれしく竹をうへてけるかな(『基俊I』)

これなど、「夜通し」、「一晩中」と口語訳出来そうなヨヨコメテである。もちろん、ヨモスガラなどと比較すると、ヨヨコメテは時間的には短いであろうから、厳密に言う、「夜通し」、「一晩中」ではない。

この歌の解釈などで問題になるのは、古典中の単語の意味と現代語の単語の意味が正確に対応していない問題がある。ヨモスガラは一晩中という意味ではあるが、ヨモスガラの終了時点は午前三時であり、一晩中は、薄暮のころであろう。すると、ヨモスガラを一晩中と口語訳したときには、その終了時点に違いがあることの付注を付けておくことが必要であろう。

#### 瞬間動詞

742 (物へまかりけるに、あまり夜ふかくいて、露しけかりければよめる) 夜を

こめてあさたつをのゝ草しけみ しほる袖は露の玉水(『俊頼I』)

252 夜をこめてたひのやとりを立つひとは くまなき月をあげぬと思(『公重』)

1000 (旅宿月といふことを、或所にて) 夜をこめてわれはたちぬる旅庵に 猶有明

の月そやとれる(『俊恵』)

590 よをこめてあさたつ霧のひまゝに たえゝみゆるせたの長橋(『定家』)

右の歌を見ると、「あさたつ」、「たひのやとりを立つ」、「たちぬる旅庵」、「あさたつ霧」、「たつきり」とある。旅に出発する、霧が立つなどに瞬間動詞のタツが使用されている。旅に出発する意味の場合は、問題なく瞬間動詞であろう。もちろん、『公重』の歌、「夜をこめてたひのやとりを」のヤドリにはヨヨコメテヤドルの意味が含まれている。動詞ヤドルは継続動詞としての用法になる。

次に『定家』の歌は、アサタツ(朝立つ)とヨヨコメテの時間が終了していることが分かるから、瞬間動詞のタツであり、ヨヨコメテの後に、「その後で」とも付

けてよいと思われる。

## 八

ところが、霧がタツ場合のタツは瞬間動詞ばかりとは言えない。第五節で、

229 (暁鹿を) 夜をこめてたちきる山のすそにしも 鳴てや鹿の人にしれぬる

(『頼政』)

6 (暁路霞といへるこゝろをよめる) 夜をこめてたつかすみたになかりせは ひとりやこえむさやの中山(『経盛』)

の歌で検討したのと同じ問題である。『西行』の「よをこめてたけのあみとにたつきり」の歌は次の歌である。

1 よをこめてたけのあみとにたつきりの はればやがてあけんとすらん(『西行I』)

「たつきり」は、「立っている霧」とも、「霧が立つ」とも考えられるのである。継続動詞とも、瞬間動詞とも考えられるのである。どちらだろうか。「はればやがてあけんとすらん」がその答えを教えてくれよう。霧が晴れたら(はれば)直ぐに日付が変わる(あけんとすらん)というのである。「たつきり」を継続動詞と捉え、「夜じゅうかかっていた霧が」という口語訳することとなる。ここではそうならないと考えるが、動詞タツが後接していて、それが、瞬間動詞であると、午前三時過ぎの意味になるのである。論理的に考えるとこの動詞タツは継続動詞と考えられ、「夜じゅう竹の網戸に立っていた霧が」の口語訳となる。

195 夜をこめてたちそやられぬ埋火の したにこかるゝ草の枕は(『閑谷』)

この歌がおもしろいのは、ヨヨコメテ「タツ」(瞬間動詞)とヨヨコメテ「コガルル」(継続動詞)と、ヨヨコメテが二つの動詞に掛かっていると思われるからである。「夜中こがれていた草枕」は、朝となっても、埋火のように立つことはない、考えられるのである。



## 九

それでは、『後拾遺集』以下の歌はどう解釈すればいいであろうか。

939 夜をこめて鳥のそらねにはかるともよに逢坂の関はゆるさじ

「夜をこめて」の後には、「鳥のそらねにはかるとも」とあるから、継続動詞の用法であることがわかる。つまり、「一晩中」、「夜通し」と口語訳すべきことがわかる。もちろん、その終了時点は、ヨノアク時間午前三時であった。その開始時点は丑の刻(午前一時)頃であった。午前三時まで「鳥のそらねにはかる」のであるから、「夜は深い」はずである。決して、夜明けと関係する時間ではない。この歌におけるヨロコメテの時間を具体的に言えば、午前一時から午前三時となることは本文から分かる。「一晩中」、「夜通し」よりは短い時間であるが、現代語には相当する単語がないから、終了時点だけ意識して、「一晩中」、「夜通し」と口語訳しておくのが、ベターな訳であると思われる。

但し書きをするまでもないが、ヨロコメテを「夜が明ける」と口語訳することは間違っているし、「夜が深い」と口語訳することは何を言っているのか分からないと言える。

## 注

- (1) 本文引用は、犬養廉ほか『後拾遺和歌集 下巻』(笠間注釈叢刊19)によった。
- (2) 萩谷朴「鳥のそら音にはかる」考——百人一首定家添削の罪」(一九八六年『日本文学研究』25 大東文化大学日本文学研究會)
- (3) 萩谷朴『枕草子解環一〇五』(一九八三年 同朋舎出版)
- (4) 拙稿「ヨモスガラ考」(『アカツキの研究』二〇〇二年 和泉書院) 所収。
- (5) 和歌史研究会編『私歌集大成Ⅰ 中古Ⅰ』(一九七八年 明治書院) ほか。
- (6) 本文の引用は全て『私歌集大成』によったが、歌番、詞書(括弧内)、歌、私歌集名略称の順によった。